
バーサスゴッド ver1.12

久保田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バーサスゴッド ver1.12

【Nコード】

N8194Y

【作者名】

久保田

【あらすじ】

ロボットアクションVRMMO「バーサスゴッド」で遊んでいた青野 菜月と仲間達。ある特別なクエストを受注したことにより、彼女達の運命は激変する。硝煙と、鉄の臭いが満ちる戦乱の異世界。その戦いの真つ只中へと飛ばされた菜月達は、そこで人族の王女と出会う。内乱に巻き込まれる菜月達は果たして元の世界に帰れるのか。

一話 やってられるか、こんなもん（前書き）

大量の新規分、派手に変えたストーリーで別物になっているという現実。

コピーして使い回せる分がほとんどなかったです！

一話 やってられるか、こんなもん

星は見えなかった。緩やかな芝生の生える丘の上はスポットライトで照らされ、辺りには光源と音響が設置してある。

バイオリンを構えると強い光が反射して、いちいち目に入って気に食わない。もう少し弱めるか角度を変えてくれ、と頼んだはずが何一つ改善されていない。

屋外で演奏するのは構わないが、音響について考えているのだから、うか、という疑問がある。

無駄に大きなカメラが何台も備えられ、自分をあらゆる角度から映そうと構えている。カメラマンは皆、真剣な表情で覗き込んでいた。

「ガキか、俺は」

ぼそつと呟いた言葉は、暴力的な光の中にかき消された。カメラマンはプロの仕事をしているだけなのだろう。

だが、自分の音を聞こうとはしていない。照明も音響も自分の仕事をしているだけ。

それが悔しい。誰も自分を見ようとはしていない。

髭の生えたプロデューサーがスタートの合図。横に立っていた女のキャスターが、話しかけてくる。テレビの画面の向こうでは綺麗に見えたはずが、近くで見ると化粧の塗りすぎでケバケバしい。香水もきつい。

「本日は天才イケメンバイオリニスト、斎藤赤矢くんをゲストを迎えての生放送コンサートです。赤矢くん、緊張してるかな？」

「はい、とても緊張しています」

くだらない、と思った。バイオリニストと呼ばれたはずが、質問は普段の生活や好きな食べ物の話。まだ駆け出しのような物だが、音楽家 斎藤赤矢としてのプライドがある。

「好きな人はいますか？」

と聞かれた時は恥ずかしさすら覚えた。動物園のパンダだって、もう少しマシな扱いをされるだろう。怒りを覚えるような質問の数々に、赤矢の忍耐が切れる寸前の事だった。

「ではそろそろ赤矢くんに一曲、演奏してもらいましょう。曲は」

あれ、と思った時にはすでに、誰もが知っている大作曲家の、誰もが知っている曲の名前が出されていた。

確かに好きな曲ではあるが、太過ぎて自分の演奏とは噛み合わない。そう言っただけ合わせでは、有名ではないが赤矢の色が出る曲で行く事をプロデューサーに納得させたはずだった。

それをこの土壇場になって、無理矢理に自分の意志を押し通そうとするこのやり口。

「ふざけんな……！」

怒りが赤矢の魂を焼き尽くす。恥と屈辱に染まった赤矢は、自重を捨てた。

お仕着せの、微妙に肩の動きを邪魔するタキシードを脱ぎ捨て、趣味の悪いネクタイを引き抜く。だがコンサートの聴衆を待たせるような無様は、どんなに最低の会場でも自分で自分を許せなくなる。カメラの向こうにいる聴衆なんてものは実感はないが、その

一線だけは絶対に守らなければいけない。そう先生に教えられてきた。

それは赤矢の中では絶対だった。

手早く脱ぎ捨てた邪魔な服を、まとめて蹴り飛ばす。コンクールなら一発アウト。しかし、生放送に乱入する度胸はないだろう。慌てるプロデューサーは立ち上がりうとして転び、何が起きているかわかっていないキャスターは口を開いてマヌケ面。

それでも慌てる事なく、仕事をするカメラマン達に赤矢は自分の口角がつまり上がって行くのを感じていた。プロの仕事は見ていて気持ちがいい。

気持ちいいが、

「俺の演奏も聞いとけよ、てめえら」

と、口の中だけで呟いた。

曲はキャスターが言った曲でも、赤矢が弾こうと思った曲でもない。

日本では知らない人はいないくらいの有名なアニメソングのクラシックアレンジだ。ただし、別なテレビ局のアニメ。

他局の宣伝になるような真似はさせてはおけないだろう。

完璧に曲に入れた、という実感がある。

テンションのままに奏でる曲は、自分で拍手喝采したくなるくらいの会心の出来。更にカメラマンの一人がにやりと笑っているのを見て、ハグの一つでもしてやりたくなった。

「は、はい！ では斎藤赤矢くんの演奏でした！」

曲の半分が終わった辺りで、無理矢理、切られた生放送だが、赤矢の中には、やりきったという手応えと、

「やべえ……菜月キレてんだろうな」

怒り狂う幼なじみを頭に浮かべていた。

「しつけないだよなあ、あいつ……」

しばらくお待ちください。

リビングのテレビには綺麗な風景と、それだけが流れている。

「こ、こ、このお……バカ赤矢ー！」

せつかくのチャンスなのに！という怒りのままに、青野 菜月は叫んだ。

肩で切ったボブカットが跳ねるくらいに勢いよく立ち上がり、食卓の上の味噌汁が揺れる。

「なっちゃん、今は食事中」

「あ、ごめん、きーちゃん」

二人の食卓は静かだ。 斎藤きいろは食事中に喋るのを好まない。食事は静かに、ゆっくりと味わって食べるというきいろのスタイルは、きいろが生まれてからの十四年、崩れたのを見た事が菜月にはなかった。

仕事で両親があまり家にいない斎藤家に、ほとんど毎日のように料理を作りに来る菜月からすれば、味わって食べてもらえるのは嬉しい。

無言で鯖の照り焼きを食べるきいろは、日本人形のような容姿で無表情だが、満足げな空気が漂っていてとても可愛らしい。

「美味しい？」

「うん」

こくり、と首を前に倒す仕草など、あまり他人に懐かない猫が自分だけに懐いたような気持ちを、菜月に与えてくれる。

そのいい気持ちのまま、菜月は味噌汁を口に運ぶ。

うん、今日もなかなかの味……！

「って違うのよ」

さすがに二回怒られたくはない。菜月は静かにツツコんだ。人間は学習するのである。

「……何がですか？」

鯖の照り焼きを片付け、ご飯を噛み締め、更に熱い日本茶を飲んでから、たっぷり五分以上の時間をかけて、きいろは言葉を返してくれた。

食事については絶対にブレないとわかっているから、菜月は言葉を急かしもしなかった。この頑固さはお兄ちゃん似だね、と考えた。

「だってさ、赤矢の演奏もつと聞いてもらえるチャンスでしょ？
なのに、あんな事したら次から呼んでもらえなくなっちゃうよ」

「兄さんなら、好きでやってると思います」

それは菜月にもわかってる。綺麗なお姉さんに質問されている時、口元は笑顔なのに眉がどんどん急な角度に上がって行った。菜月も「もっとマシな事を聞かないのかな」と思うような質問ばかりだったが、それくらい我慢して欲しかった。

「赤矢の演奏は綺麗なんだからさ。もっと沢山の方がいいんだよ！」

「本当になっちゃうんは兄さん好きですね」

きいろの言葉を女子高生、青野 菜月は鼻で笑う。きいろはいつも赤矢と菜月をくつつけたがるが、もうすでにこの程度の言葉遊びでは揺るがない。

「演奏だけはね。アホで性格がどうしようもなく悪い分、神様が哀れんでバイオリンの才能を分け与えてくれたんだろうね」

だから、と思う。それを投げ捨て、その時の気分で崖に向かって走るような事をする赤矢を、すぐく勿体無く感じてしまう。好きにやるのはいい。しかし、他人に迷惑をかけて泥を塗るような事をしたら、次から呼んでもらえなくなってしまう。

性格が悪いせいで、あまり友達もない赤矢が心配だというものがある。このまま行けば無職で苦勞に苦勞を重ね、老後は孤独に死んでいく事になるのではないか。

そのときいろが赤矢のそばにいればいいが、こんなにも可愛い子が誰のお嫁さんにならないのは有り得ない。

きつとイケメン、誠実、高収入と三拍子揃った王子様がきいろを迎えに来るはずだ。

しかし、

「お姉ちゃんは簡単に許しませんよ！ きーちゃんが欲しいなら、私を倒してからにしてもらおうか！」

「何の話ですか」

「きーちゃんがお嫁さんに行くなら、私のお目に叶う人じゃないと駄目だからね！」

「兄さんも同じ事を言いそうですね」

「そうだねえ」

性格は歪みきつっているが、あのシスコンっぷりだけは評価が出来る。

そんな事を考えながら菜月はお茶に手を伸ばしたが、空を切った。

「おう、最低でも年収は十億な」

「赤矢！？」

「おかえりなさい、兄さん」

「今帰ったぜ」

「それより私のお茶だよ、それ！」

いつの間にか菜月の横に座り、ふてぶてしくお茶を啜る赤矢は、テレビの中で着ていたYシャツと細身のスラックス姿。 だらしく着崩した格好は非常に見苦しい。

「何その格好。 胸が見えるでしょ！ あんたの貧相な胸板見せられたって、誰も喜ばないわよ！」

「うるせえ！ 家に帰ってきてまで、真面目くんぶってられるかこんなもん」

オールバックにセットされていた髪もかきむしったのか、山賊もかくやという有り様。

「きーちゃんの教育に悪いの！」

ギヤーギヤーと喚く赤矢を無視して、Yシャツのボタンを閉めていく。 せめて、第一と第二ボタンだけは勘弁してあげるのが、出来る幼なじみの優しさだ。

「大体、あんた何してるの！ あんな事したら二度とテレビに呼んでももらえないんだからね！」

「はあ？ むしろ、こっちからお断りだね。 馬鹿と馬鹿が手を繋いで踊ってる中に、俺も馬鹿面引っさげて踊れってか？」

「少しくらい我慢しなさい！」

「やだよ、面倒くせえ」

「この社会不適合者！」

「おー、あほの菜月の分際で難しい言葉使えまちたねー」

「うぎいいいいいい！」

「兄さん」

それまで静観していたきいろが赤矢に声をかけた。　静かで平坦な声だが、しっかりとした重さがある。

「なっちゃんは兄さんを心配して言ってくれているのです。　それを茶化すのは、どうかと思います」

「う……そうだな」

きーちゃんは私の味方だよね！さすが！と菜月は喜ぶ。

「なっちゃん」

「あれ、私も？」

が、次の瞬間には飛び火していた。

「兄さんは口は悪いですが、音楽はきちんとします。　よほど腹に耐えかねる事があったのでしょ。　あまり言わないでおいであげてください」

「うー……」

趣味で赤矢が子供の頃から弾いていたバイオリンが、偉い音楽家の先生に見出されたのは中学生の時、完全な偶然だった。

楽譜もなしに好き勝手に弾いていた赤矢の演奏を聞いた先生が、いきなり斎藤家に乗り込み、

「この子を僕にください！」

と、言ってきたのは今でも語り草だ。　白いお髭がよく似合う紳士なのに、その事でからかうと顔を赤く染めるのが可愛らしかった。朝から晩まで先生の元でレッスンを受ける赤矢と遊ぶ機会はなく　なったが、あまりに嬉しそうであればもう割って入れそうにないな、と思ったのをよく覚えている。

その先生が去年亡くなり、それから赤矢は変わった。　どこか気難しくなり、いきなり癇癪を起こす事も増えた。　レッスンを受けるにどこかに行く事も、海外留学に誘われても話を迷わず蹴った。

「きいろをお前に任せて、海外に行けってか？　冗談きついで」

あの時はああ言っていた。　だけど、今の赤矢には何かが欠けていた。

もし先生がいたら、テレビで無茶をしたりしなかったのだろうか。それとも先生がテレビ局に殴り込んだんだろうか。

赤矢の才能に惚れて、わざわざヨーロッパから日本に移り住んだ彼ならやりかねないな、と思った。

「ごめんね、赤矢」

「……俺も悪かった」

それでもこうやって人に謝れるうちは大丈夫だよな、と菜月は僅かに安心を得る。　顔を背けて、謝っている態度ではないにしても、赤矢がいつか壊れてしまいそうな気がしている。　だけど、きいるがいるし、何とかなるはずだ。　菜月もご飯くらいなら作ってやる。

「赤矢、ご飯食べたの？」

「うんにゃ、何か作ってくれ」

「鯖はもうないし、お肉でいいかな」

明日、赤矢のテレビ出演記念にしようと、なかなかいいお肉を買っていた。残念だな、と素直に思う。だけど、それを表には出せない。

「ああ、任せるわ」

「それが一番、困るんだけどなあ……」

何でもいいが一番困る。それが料理をしない人間には理解出来ないのだろうか。

ぼやきながら立ち上がった菜月の背中に、赤矢の声がかかった。いつも通りの、軽い声で。

「そっぴや明日、日曜日だし、ゲーセン行こうぜ」

赤矢がバイオリン以外に興味を持ち始めたのは、先生が亡くなってからだな。ふとそんな事に気付いて、菜月は答えた。

「いいよ。付き合ってあげる」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8194y/>

バーサスゴッド ver1.12

2011年12月31日18時49分発行